

全林研会長賞

千葉県

千葉県林業研究会 千葉支部

所在地 > 千葉県千葉市

設立 > 昭和40年3月

会員 > 男14人 女1人 年齢 > 38歳～66歳 平均58.3歳

主なプロジェクト

- ◆ スギ非赤枯性溝腐病被害林再生への取り組み

1. 地域の概要と林業上の問題

私たちが活動している千葉市・市原市は千葉県のほぼ中央に位置し、面積は約6.4万haで県土の約12%を占め、人口は約124万人と県人口の約20%を占めています。東京湾岸には県都千葉市や幕張新都心などの都市部や京葉工業地帯が広がり、内陸部には里山景観を残す田園地帯や森林が広がる丘陵地が存在し、大都市と田舎が同居するような地域です。

森林面積は区域面積の約29%に当たる1万8,399haで、この内34.7%が人工林となっています。人工林の内訳はスギ80.0%、ヒノキ11.5%、その他8.5%とスギが多くを占めていますが、中でも昭和30～40年代にかけて広く植栽されたサンプスギのほとんどが非赤枯性溝腐病に罹ってしまっています。

サンプスギは他のサシスギと同様に通直・完満であり、枝が細いことから、枯れ上がりが早いことから枯れ枝の落ちもよく、また、心材が淡紅色で美しいなどの特徴を持ち合わせていることから、県の北中部を中心に多く植栽されましたが、後に非赤枯性溝腐病に極めて弱いことが分かりました。

非赤枯性溝腐病とはチャアナタケモドキという菌により材が腐朽する病気で、肥大成長よりも菌の伸長スピードが早いため、侵された部分は巻き込まれないので徐々に腐れが拡大し溝が大きくなります。

この腐れた溝の発生は高さ2m～3m前後に多く、植栽から20年前後経って明らかになってきます。溝の部分は腐朽して脆くなっているので、春一番

や台風などの強風によって市内のいたる所で折れています。被害率も高く、溝に気がつく頃には概ね8割以上が羅病しています。

材価が安い上、何十年も育てた木が病気で価値を著しく下げてしまい、森林所有者の山離れに一段と拍車をかける一因となっています。

2. グループの結成について

千葉県林業研究会は、森林・林業全般にわたる基礎的・専門的な技術・知識を付与し、後継者としての資質の向上と育成確保を図る目的で昭和39年から県が開催した「山村中堅青年林業教室」の研修の修了生により発足しました。

私たちのグループはこの千葉県林業研究会の千葉支部として昭和40年に結成されました。

今では林業教室修了生以外に、会員が山関係の知り合いを勧誘するなどして入会した仲間が加わり、「地域林業の振興に寄与すること及び会員相互の親睦を図ること」を目的として活動しています。

3. 実践活動の状況

(1) 共同作業について

会員の所有林にもサンプスギが多く植栽しており、そのほとんどが非赤枯性溝腐病の被害を受けています。このような状況の中、10年前から被害の著



非赤枯性溝腐病の被害木

しい千葉市内の会員所有林において、被害林を伐採して再造林し、健全な森林へ再生するための共同作業を支部活動の大きな柱として行っています。

具体的には、被害木を伐採（被害率が高いためほぼ皆伐）し、林内に集積するところまでを共同作業として行い、その後植栽できる状態までの片づけや再造林を森林所有者である会員が自ら行っています。

仲間同士の共同作業ですが、私たちは森林所有者が日当を支払うという形をとっています。日当は

チェーンソー持込み、交通費込みで1日16,000円(うち3,000円がチェーンソー持込み・交通費)を支払っています。

千葉県では、被害森林再生事業やサンブスギ林再生事業という補助事業があり、伐採・材の搬出・枝葉の集積に対し県と市から補助金が出るため、それを日当支払いに当てています。

日当を支払うことで、「仕事」としての意識が強くなり、作業は朝8時から夕方5時まででしっかり行い、仕事量をこなすことに対する責任感も生まれます。

頼む側の会員にとっては遠慮せず仕事を頼むことができ、共同作業を円滑に進める上でのメリットも大きく、農林業とはいえ仕事を持つ会員同士が林業技術の向上を図りながら共同作業を続けられる大きな要因だと考えています。

(2) 共同作業の実際

作業には会員が所有するグラブプルを装着した小型バックホウ(3～4t)を1～3台使用します。バックホウとチェーンソーを持った伐り手数名が1グループとなり、2～3グループで作業を行います。



伐倒

木を伐倒する際は、バックホウで力を加えることにより伐倒方向を確実にし、伐り手の安全を確保します。5～8本程度倒したところで伐り手が枝払いと玉切りを行い、それをバックホウで林内に集積します。バックホウが集積を行っている間に伐り手は次の伐倒木周辺の整理や受口作りをしておく、という工程を繰り返して作業を進めます。

(3) 共同作業の歩掛り調査

自分たちの共同作業もやり方が確立してきたため、近年実施した6カ所のデータ収集を行い、人工や作業量についての調査を行いました。



バックホウで集積

現地は植栽ができるよう林内集積後に

材の整理をしますが、林内集積以降の作業は森林所有者である会員がほぼ一人で行っているため、共同作業で行う伐採・林内集積までの調査としました。

調査の結果、6カ所はいずれも傾斜が少なく平坦な40年生以上のサンブスギ林で、平均面積は0.65ha、平均立木密度は1,300本/haでした。ha当たりのオペレーターを含めた平均人工は30.1人で、バックホウの平均使用台数は11.4台でした。

バックホウ1台に対する伐り手の人数は2人の時が効率が良く、これらのことから、私たちの共同作業ではバックホウ2台と伐り手4人の計6人で作業した場合、およそ5日間(延べ30人、10台)で1haの伐採・林内集積作業が行えることが分かりました。

4. グループ活動が会員や地域社会に及ぼした影響

所有林の多くが非赤枯性溝腐病の被害にあった会員は、若い頃から育ててきた木が病気となり無念な伐採を行わなければなりません、一緒に山掃除をやってくれる仲間がいることで、希望の造林を行い子孫に残そうという気持ちになります。

また、共同作業に参加する会員の約半分は原木シイタケ生産主体の農林家であるため、植菌後の手の空く時期などの良い収入となっています。

千葉市森林組合では現在直営の作業班が動いていないため、他の森林所有者は組合が紹介する業者などに山仕事の依頼をしていますが、「千葉支部は早く、安く仕事をしてくれて助かる」と評価をしてもらっています。私たちも所有者の期待に応えられるよう、会員外からの依頼の時はできるだけ補助金内で作業が終えられるよう特に気を配って作業しています。

これまで共同作業で再生にかかわった森林の面積は、合計で約4.07haとなり、これは過去5年間に千葉市内で再生された被害林の59%に当たります。

5. 今後の目標

会員はみな仕事を持っていますので共同作業を行える日数は限られてしまっていますが、会員の被害林はまだ残っていますし、今まで仕事を受けた森林所

有者からは「他の山もやって欲しい」と要望されていますので、自分たちが無理せず実施できる範囲内で森林整備を実践していきたいと考えています。

また、今後は若い世代を共同作業に誘って会への加入を促したり、森林施業技術の伝達もしていければと思っており、こういったことを通して会の目的どおり「地域林業の振興に寄与」していきたいと考えています。

